

黙示録9章「悪霊どもの攻撃」

1A 底知れぬ所からのイナゴ 1-12

1B 死ねない苦しみ 1-6

2B 王たる破壊者 7-12

2A 人類の三分の一を殺す騎兵 13-21

1B ユーフラテスの墮天使 13-19

2B 悪霊から悔い改めない人々 20-21

本文

黙示録9章に入ります。私たちは前回、第七の封印が解かれて、その中に七つのラツパがあったところを読みました。第一のラツパから、第四のラツパまでが吹き鳴らされたところを読みました。主がご自分の怒りを地上に現されましたが、それが聖徒たちの祈りと共に香壇の煙と共に神に届きました。そして御使いが祭壇の火の入った香炉を、地に投げつけます。聖徒たちが、主の御心に従って生きる中で、反対を受け、患難を受け、そして殉教していきます。そのように神の御心に逆らう世に対する神の怒りの現れであります。第一から第四までは、自然界に対して災いが下りました。第一のラツパで、地上の植物の三分の一が火で焼けました。第二で海の三分の一が血に変わりました。それで海の生物や船が血となりました。さらに第三で、陸の水源となっているところに、苦よもぎと呼ばれる星が投げ込まれ、人々はその水を飲んで死にました。そして第四で、太陽と、月と星の三分の一が暗くなりました。

そして、中天に鷲が飛んでいたのです、「災いだ、災いだ、災いだ」と三度叫びました。そうです、これから下る三つの災いは、先の四つの災いより、さらに恐ろしいものなのです。私たちは今晚、9章にてそのうちの二つ、第五と第六の災いを学びます。これまでは天から降る、いわゆる天災でありましたが、この二つの災いは地の下また地上にいる悪霊どもによる災いであります。

私たちは、終わりの日が近づくにつれ、悪霊による災いが顕著になってきています。「ヤコブ 3:14-15 しかし、もしあなたがたの心の中に、苦いねたみと敵対心があるならば、誇ってはいけません。真理に逆らって偽ることになります。そのような知恵は、上から来たものではなく、地に属し、肉に属し、悪霊に属するものです。」このように、心にある苦みやねたみ、敵対心などを刺激する悪霊の仕業があります。そして、偽りの教えも悪霊によります。「1テモテ 4:1 後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ」、結婚することを禁じたり、食物を断つことを命じたりするとあります。これら悪霊どもの働きが、第五と第六のラツパによって一気に全開し、神の御心に逆らい、神を侮って生きて来た者たちに対して苦しみを与える内容になっています。

1A 底知れぬ所からのイナゴ 1-12

1B 死ねない苦しみ 1-6

1 第五の御使いがラツパを吹き鳴らした。すると、私は一つの星が天から地上に落ちるのを見た。その星には底知れぬ穴を開くかぎが与えられた。

「一つの星」であります。これは 8 章 10 節の苦よもぎと呼ばれる大きな星が落ちたというのは、意味が違います。8 章のはそのまま、文字通りの巨大な隕石です。9 章は読み進めれば、11 節に「底知れぬ所の御使い」であります。墮落した天使であり、サタンのことです。黙示録、そして聖書では、御使いのことをしばしば「星」と形容しています。黙示録 12 章において、天においてサタンが、天の星の三分の一を引き寄せたとありますが、それは彼の手下になる墮落した天使であることがわかります。

この星が、「天から地上に落ちるのを見た。」とあります。サタンは天使長であり、神のそばにいた栄光に輝く存在でありましたが、高ぶって墮落して、その領域から落ちたことが書かれています。イザヤ書 14 章にて、バビロンの王に対する預言があります。バビロンの王に対するものなのですが、その王の背後に働いていた力、主権があり、それがサタンであることがわかります。「14:12-15 どうしてあなたは天から落ちたのか。…あなたは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。』しかし、あなたはよみに落とされ、穴の底に落とされる。」陰府に落とされ、穴の底に落とされるとありますね。これが、彼の定めです。底知れぬ所へ悪魔は落とされ、そこに千年の間、鎖につながれます。そして、燃える火と硫黄の池に投げ落とされます。

イエス様も、天からサタンが落とされたことを語られました。七十人の弟子がイエス様のところに帰って来て、悪霊どもが、イエス様の名の権威に服従するのを目撃しました。それで、主がこう言われます。「ルカ 10:18-19 イエスは言われた。「わたしが見ていると、サタンが、いなずまのように天から落ちました。確かに、わたしは、あなたがたに、蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けたのですだから、あなたがたに害を加えるものは何一つありません。」天から落ちましたが、イエス様は、弟子たちには蛇やさそりを踏みつけ、敵に打ち勝つ権威を与えられたと約束されます。これから、さそりのように害を加えることのできる悪霊どもが出て来ます。そして蛇の頭が尾についている騎兵が第六のラツパで出て来ます。しかし、これらの力に打ち勝つ権威が与えられたのだ、ということです。そして害を受けることはないとの約束です。神のしもべたちが、額に印が付けられているので、害を受けない姿も出て来ます。イエスの弟子として生きるというのは、このように大きな力と権威が与えられていることを知るべきですね。「1ヨハネ 4:4 子どもたちよ。あなたがたは神から出た者です。そして彼らに勝ったのです。あなたがたのうちにおられる方が、この世のうちにいる、あの者よりも力があるからです。」

そして、「底知れぬ穴」を開く鍵が与えられたとあります。聖書の中には、地獄のことが啓示されています。地の下にある獄屋ということですね。主に三種の種類に分かれます。一つは、「ハデス」です。これは新約聖書の言葉ですが、旧約聖書の同義語は「陰府」です。旧約においては、天国と地獄について、新約のようにはっきりとした啓示が与えられていませんでした。陰府は、死者が行くところという概念があるだけでした。ヨブ記には、こう書かれています。「死者の霊は、水とそこに住む者との下にあって震える。よみも神の前では裸であり、滅びの淵もおおわれぬ。(26:5-6)」海底のさらに奥にあるところ、また、ある箇所では、地の下にあると書かれています。実際、コラがアロンとモーセに逆らったときに、地が割れて、地がコラを飲み込んだとありますが、モーセはそのことを、「よみに下る(民数記 16:30)」と言いました。主は、パリサイ人に、もう天からのしるしはないと言われて、「人の子も、三日三晩、地の中にいるからです。(マタイ 12:40)」と言われました。主は、十字架につけられた後、ハデスにおられ、それからよみがえられたのですが(使徒 2:31)、そのことを「地の中」と言われています。

そして死者が行くハデスは、ルカ 16 章によると、二つの部分に分かれていることを読むことができます。一つは、「アブラハムのふところ」と呼ばれるところで、神の約束を待ちながら死んだアブラハムとともに約束が実現するまで待っている、慰めの場所です。もう一つは、熱さの中で苦しみを味わう場所で、前者にはラザロが、後者には金持ちが入りました。この、アブラハムのふところのほうは、主が陰府に下られて、よみがえり、天に引き上げられるときに、彼らもまた引き上げられ、天の中に入ることができるようになりました。罪の贖いは、動物の血では完全ではなかったのので、彼らは天国に入ることができていませんでしたが、御子の血が流されたことによって、罪が取り除かれ、天に入ることができるようになったのです。残りは、最後の審判の時に死とハデスが死者を出した、と黙示録 20 章にあります。その時に不信者は甦り、神の裁きを受けて火と硫黄の池に投げ込まれます。

ですから、ハデスがありますが、その他にゲヘナがあります。ゲヘナは、エルサレムの町の南にある「ヒノムの谷」から来ている言葉ですが、そこでは絶えず、ゴミが焼却されていました。そのため、火が永遠に燃えているところとして、ゲヘナは、永遠のさばきの場として設けられています。ハデスは、元々、悪魔と悪霊どもが投げ込まれる場として作られました。イエスは、「悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火にはいれ。(マタイ 25:41)」と言われます。けれども、悪魔の惑わしに従う人々は、悪魔とともに永遠の火の中に投げ込まれる運命を辿るのです。

そして、この他に「底知れぬ所」があります。これは、「底がない縦穴」という意味です。ここは、墮落した天使どもを閉じ込めておくところであると考えられます。ユダの手紙には、「また、主は、自分の領域を守らず、自分のおるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の束縛をもって、暗やみの下に閉じ込められました。(6 節)」とあります。先ほど底知れぬ所は、主が地上に再臨された後、悪魔が千年間、鎖につながれることとなります。ゲラサ人の地方

で、イエスさまがレギオンという悪霊どもに対峙されたとき、レギオンは、「底知れぬ所に行け、とお命じになりませんように。(ルカ 8:31)」と言いました。それで、豚の中にはいれ、とイエスさまは命じられました。ですから、地上に徘徊している悪霊どもがいるし、既に底知れぬ所に閉じ込められている悪霊どももいます。

そして、患難期半ばに、死んだようになって甦ったとされる獣、反キリストが、「底知れぬ所から上って来る獣(11:7)」とあります。獣が一度、底知れぬ所に落とされても、鍵を与えられていた悪魔がそこから上らせて、自分の位、力、権威を与えるのです。このように、いわゆる「パンドラの箱」のような、「開かずの扉」のような存在であった底知れぬ所、凶悪犯が収監されているような所を、神がサタンに対してそれを開く鍵を終わりの日に与えられます。それで地上が、文字通りの「生き地獄」になるのです。まだ死んでいないのに、この地上で死んだ後の苦しみを味わいます。

ところで、なぜ、神は「かぎが与えられた」のでしょうか？主ご自身は、「死とハデスとのかぎ」を持っておられる方としてヨハネに現れました。ハデスの鍵ではありませんが、底知れぬ所の鍵も主が掌握しておられたと思います。しかし、サタンに任せられるのです。それは、福音の真理を受け入れない者たちに対する、裁きであります。「2テサロニケ 2:9-12 不法の人の到来は、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行なわれます。なぜなら、彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかったからです。それゆえ神は、彼らが偽りを信じるように、惑わす力を送り込まれます。それは、真理を信じないで、悪を喜んでいたすべての者が、さばかれるためです。」福音の真理を信じないので、神はサタンの惑わしに惑わされるままにされます。神が、今、悪霊どもが激しく動くのを敢えて留めておられます。恵みの中で神を知ってほしいからです。けれども、それは無制限にあるものではありません。神がお決めになられた時を過ぎれば、悪魔のなすがままにさせるのです。それが、9章の中身と言ってよいでしょう。

このように、神は悪魔と悪霊どもさえ、ご自分の目的のために使われます。彼らは神に反逆する霊であります。けれども、全権者である神の許可なくしては、何も行なうことができません。けれども、主は彼らが働くのを許されて、ご自分の栄光のために用いられる姿を、聖書の中にたくさん見ます。例えば、ヨブのことを思い出してください。サタンは主の前で出て、ヨブの財産を奪うように願い出ます。主は、「では、彼の全ての持ち物をお前の手に任せよう。ただ彼の身に手を伸ばしてはならない。(1:12)」と言われました。神の栄光が、ヨブの苦しみと忍耐を通して現れるためです。イエス様の十字架こそ、まさにその代表です。闇の力が、イエス様が死に渡されるようになりました。しかし、その力は神の永遠の救いのご計画の中で使われていたのです。

2 その星が、底知れぬ穴を開くと、穴から大きな炉の煙のような煙が立ち上り、太陽も空も、この穴の煙によって暗くなった。

まるで、地の下のマグマから煙が上がっているかのように、煙が上がっています。神がソドムとゴモラを裁かれた時に、同じようにかまどの煙が上がっていました。「創世 19:28 彼がソドムとゴモラのほう、それに低地の全地方を見おろすと、見よ、まるでかまどの煙のようにその地の煙が立ち上っていた。」同じように、神は、ご自分の畏敬を現すために煙の中で現れました。「出エジプト 19:18 シナイ山は全山が煙っていた。それは主が火の中にあつて、山の上に降りて来られたからである。その煙は、かまどの煙のように立ち上り、全山が激しく震えた。」神が、底知れぬ所にご自分の裁きを現しておられたのですが、それが開かれるとその煙が立ち上ったのでしょう。

そして、「太陽も空も、この穴の煙によって暗くなった。」とあります。先の災いで既に、三分の一の光がなくなったのですが、さらにこの煙によって暗くなりました。これは、ヨエルの預言にも書かれています。五旬節の時にペテロが引用した箇所です。「わたしは、上には天に不思議なわざを示し、下には地にしるしを示す。それは、血と火と立ち昇る煙である。主の大いなる輝かしい日が来る前に、太陽はやみとなり、月は血に変わる。(使徒 2:19-20)」ところで、黙示録 9 章はヨエルに神が与えられた預言が色濃く成就しています。次のいなごの災いもその一つです。

3 その煙の中から、いなごが地上に出て来た。彼らには、地のさそりの持つような力が与えられた。

これは、文字通りのいなごではありません。ここに書かれているとおり、さそりの持つような力があり、また後に出てくる描写を見ても、彼らは昆虫のいなごではありません。けれども、いなごのような災いをもたらします。聖書に出てくるいなごの災いは、出エジプト記の十の災いの一つが有名です。雹が降った後に、いなごの大群が押し寄せました。雹が降って、地の作物は大きな被害を受けましたが、まだ芽の状態であった作物は害を受けませんでした。ところが、いなごの大群が襲ってきて、芽もすべて、文字通り根こそぎ作物という作物を食べ荒らして、通り過ぎたのです。そして、いなごの大群による災いが、ヨエル書の中に書いてあります。ヨエルは、度々訪れるいなごの大群による被害をとおして、イスラエルが敵によって攻められることを預言しました。主の日に、とてつもない数の騎兵が国々を荒らすことを預言しています。次の第六の災いにてこの騎兵の災いが襲います。第五のラッパのいなごの災いは、いなごのような被害をもたらす悪霊どもの災いをまた別個に予告していたのです。

4 そして彼らは、地の草やすべての青草や、すべての木には害を加えないで、ただ、額に神の印を押されていない人間にだけ害を加えるように言い渡された。

この悪霊どもの災いは、先の自然に対する災いとは異なり、人間にだけ害を与えます。草木を食い尽くすいなごとは正反対ですね。ちょうど中性子爆弾が、建築物などは破壊せずに、生きている物だけを殺傷するように力を持っているように、であります。しかし、「額に神の印を押されていない

い人間にだけ」にしか、害を与えられません。7章で、私たちは、14万4千人のイスラエル人が額に神の印を押されたところを読みました。彼らは患難期を通り抜けて、主イエスが地上に戻って来られるまで守られます(14章)。他の信者たちも印を押されていたことでしょう。先に話したように、神はこうした悪霊による災いから、私たちを守るのです。「神から生まれた方が彼を守っていてくださるので、悪い者は彼に触れることができないのです。(1ヨハネ 5:18)」

5 しかし、人間を殺すことは許されず、ただ五か月の間苦しめることだけが許された。その与えた苦痛は、さそりが人を刺したときのような苦痛であった。6 その期間には、人々は死を求めが、どうしても見いだせず、死を願うが、死が彼らから逃げて行くのである。

この災いの目的は、「死なないで苦しめる」ことであります。「ただ五か月の間」とありますが、いなごの生きているのは、5月から9月という五カ月間とされています。その間のみ、彼らを苦しめます。死にたいほど苦痛なのに死ねないというのは、恐ろしいことです。例えば、拳銃自殺をしたところで、自分の頭が半分なくなったとしても、それでもその痛みを伴いながら生き延びてしまいます。ヨブが、死にたいのに痛みの中にある苦しみを次のように言い表しました。「3:21 死を待ち望んでも、死は来ない。それを掘り求めても、隠された宝を掘り求めるのにすぎないとは。」ヨブの場合は試練ですが、ここでは神は不信者らに、「死んだということは、意識がなくなるということではないのだ」と、死後の苦しみについて教えられたのだと思います。金持ちとラザロの話を出していただくと、金持ちはハデスにおいて苦しみ悶えています(ルカ 16:25)。そして獣の国にいる住民は、「14:10-11 聖なる御使いたちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。そして、彼らの苦しみの煙は、永遠にまでも立ち上る。」とあります。

2B 王たる破壊者 7-12

7 そのいなごの形は、出陣の用意の整った馬に似ていた。頭に金の冠のようなものを着け、顔は人間の顔のようであった。8 また女の髪のような毛があり、歯は、ししの歯のようであった。9 また、鉄の胸当てのような胸当てを着け、その翼の音は、多くの馬に引かれた戦車が、戦いに馳せつげるときの響きのようであった。10 そのうえ彼らは、さそりのような尾と針とを持っており、尾には、五か月間人間に害を加える力があつた。

まことのおぞましい姿です。預言者ヨエルは、いなごの災いに見舞われているイスラエルの国で、一つ国民が攻め上って来ることを預言しました。こう言っています。「1:6 一つの国民がわたしの国に攻め上った。力強く、数えきれない国民だ。その歯は雄獅子の歯、それには雄獅子のきばがある。」私たちは、悪霊の世界というのは普段、見聞きしません。しかし、オカルトに携わって悪霊に取りつかれた人、遭遇した人々は、おぞましい姿を生で目撃しています。麻薬をやりながら、そのようなオカルトにはまっている人もいますし、また不品行を伴っている場合もあります。実に、初代教会の時は、オカルト、偶像礼拝、薬物、不品行は混じり合わせて行っていたことを、私たちは七

つの教会の町々の背景で学んでいました。パウロは、エペソの教会の信者に、「エペソ 5:11-12 実を結ばない暗やみのわざに仲間入りしないで、むしろ、それを明るみに出さない。なぜなら、彼らがひそかに行なっていることは、口にすることも恥ずかしいことだからです。」と語っています。

この容姿は、他の聖書の箇所に出て来る、いろいろな存在とも相重なっています。金の冠とありますが、24 人の長老たちも冠をかむっていました。顔が人間の顔ではありますが、四つの生き物、またケルビムも人間の顔を持っていました。そして長い毛があり、それから歯が獅子の歯のようだとありますが、ダニエルの見た第一の獣は獅子であり、第四の獣は、鉄の牙を持っていましたね。そして鉄の胸当てですが、鉄はローマの粉々に打ち砕く力を示していました。そしてそのダニエルの見た獣と同じく、翼を持っています。そしてその翼の音が、戦いに馳せつける時の響きであると思いますが、ケルビムが翼を動かすと、大水の轟のようである、陣営の騒音のような大きな音だとあります(エゼキエル 1:24)。いろいろな意味で、墮天使の姿をしております。そして最後に、尾を持っていて、それがサソリのような尾と針を持っています。イエス様が、蛇やさそりを私たちが踏みつけると約束してくださいましたが、悪魔がもたらす痛みと苦しみです。

11 彼らは、底知れぬ所の御使いを王にいただいている。彼の名はヘブル語でアバドンといい、ギリシヤ語でアポリュオンという。

実際のイナゴは箴言 30 章 27 節に書かれているように、王はなく、隊を組んで出て行きます。けれども、ここでは王がいます。彼は、底知れぬ所の王として、後に獣をそこから上らせ、彼に位と、力と権威を与えるのです。そして彼の名は、「アバドン、アポリュオン」とありますが、どちらも「破壊」という意味です。破壊者です。悪魔は私たちを破壊します。「ヨハネ 10:10 盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。」私たちは、このように人々の生活を破壊する者が何をしているのか、目の当たりにしながら戦っています。

12 第一のわざわいは過ぎ去った。見よ。この後なお二つのわざわいが来る。

これで、第一の災いが過ぎ去りました。けれども、さらに二つの災いがあります。

2A 人類の三分の一を殺す騎兵 13-21

1B ユーフラテスの墮天使 13-19

13 第六の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、私は神の御前にある金の祭壇の四隅から出る声を聞いた。

第六のラッパです。ここでは、金の香壇から声がしています。ラッパが吹き鳴らされる前に、御

使いが、香壇の火を地に投げつけたことを思い出してください。その同じ香壇の、四隅、あるいは角から声が聞こえました。香壇の四隅は、角の形をしています。つまり、ここには聖徒たちの祈りが込められた災いと言えます。神の御心になるように、天においてなされているように、地にも行なわれるようにということです。人々が神に反逆している世において、神がご自分の主権を表してくださいますように、という祈りです。

14 その声がラツパを持っている第六の御使いに言った。「大川ユーフラテスのほとりにつながれている四人の御使いを解き放せ。」

第五のわざわいは、底知れぬ所からの悪霊ですが、第六は、ユーフラテス川にいる御使いからのものです。「ユーフラテス川」は、聖書の中でとても大事な霊的意味を持っています。創世記の天地創造の話を出せませんか、エデンの園には四つの川が流れていて、その一つがユーフラテス川でした。けれども、そこに悪魔がいて、蛇が女をだまして、禁じられた実を食べさせました。そして、ユーラテス川河畔地域で、ノアの子孫が一つに集まり、そこに天に届く、自分たちの名のための塔を建てようとした。バベルの塔です。それからというもの、その地域バビロンは、偽りの宗教の発祥地となったのです。

先ほど引用したイザヤ書 14 章のルシファーについての預言は、実際は、バビロンに対する預言でした。バビロンへの主のことばが語られている中で、その背後にいるルシファーが語られていました。バビロンには、このように悪魔と悪霊の存在があります。黙示録を読み進めると、16 章で、ハルマゲドンに集まるために、東からの軍勢が、枯れたユーフラテス川を渡って来ることが書かれています。竜の口と、獣の口と、にせ預言者の口とから、かえるような汚れた霊どもが三つ出て来る、と書いてあります。悪霊がその地域から出てきます。そして、黙示録 17-18 章には、「すべての淫婦と地の憎むべきものの母、大バビロン」が出てきます。そこで御使いが叫びました。「18:2 倒れた。大バビロンが倒れた。そして、悪霊の住まい、あらゆる汚れた霊どもの巣くつ、あらゆる汚れた、憎むべき鳥どもの巣くつとなった。」

ですから、ここでは「四人の御使い」は墮天使でありましょう。7 章では、地に海に、木に害を加えないように地の四方の風を押さえていた四人の御使いが出ていますが、ここでは墮落した四人の使いがそこに閉じ込められていたということになります。そして大事なのは再び、これを支配しているのは、神ご自身だということです。「解き放せ」と神が命令しておられます。

15 すると、定められた時、日、月、年のために用意されていた四人の御使いが、人類の三分の一を殺すために解き放された。16 騎兵の軍勢の数は二億であった。私はその数を聞いた。

驚くことに、いつからそこに押さえられていたのでしょうか、四人の使いは、「定められた時、日、

月、年のために用意されていた」とあります。神の永遠のご計画の中で、この時のために定められていた、閉じ込められていたということです。それだけ、神は初めから人の墮落を知っておられて、裁かなければいけないことを知っておられて、そしてその時の具体的な計画を持っておられるということです。神は、主イエスが戻って来られる時も同じようにして定めておられますね。「マタイ 24:36 ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。」

そして、ヨハネは数を聞きました。驚くべき人数です。「二億であった」とあります。ギリシヤ語では、もっと強調されていて、「一万かける一万かける2」というように書かれています。それで二億です。そして、「私はその数を聞いた。」とヨハネは、聞いたとおりをそのまま証言していますから、実際にそれだけの人数がやってきます。

17 私が幻の中で見た馬とそれに乗る人たちの様子はこうであった。騎兵は、火のような赤、くすぶった青、燃える硫黄の色の胸当てを着けており、馬の頭は、ししの頭のように、口からは火と煙と硫黄とが出ていた。18 これらの三つの災害、すなわち、彼らの口から出ている火と煙と硫黄とのために、人類の三分の一は殺された。19 馬の力はその口とその尾とにあって、その尾は蛇のようであり、それに頭があって、その頭で害を加えるのである。

この騎兵も、悪霊どもが現れてきていることは明白です。胸当てをつけていますが、赤、青、硫黄の色であり、まさに火と硫黄の池と同じ、地獄の色をしています。馬の頭がライオンの頭のようになっていて、先と同じです。そして特徴的なのは、火と煙と硫黄が口から出てきていることです。これもまた、地獄の火が口から出てきていると言えるでしょう。「火と煙と硫黄」で人は殺されます。地獄の火で殺されていると言ってよいでしょう。おまけに、どこで人に害を加えるかと言えば、尾が蛇の頭になっていて、それで危害を加えます。サタンのもたらす苦しみです。そして、「人類の三分の一は殺された」という驚くべき被害が書かれています。七つのラツパの災いにおいて、その天災によって多くの人が死にましたが、さらに生き残っている人々の間で三分の一が死にます。

この啓示は、ヨハネが新たに受けたものではありませんでした。ヨエルが主の日は、こうなるのだと神に言われたことでありました。2章を読んでみましょう。

1 シオンで角笛を吹き鳴らし、わたしの聖なる山でときの声をあげよ。この地に住むすべての者は、わななけ。主の日が来るからだ。その日は近い。2 やみと、暗黒の日。雲と、暗やみの日。山々に広がる暁の光のように数多く強い民。このようなことは昔から起こったことがなく、これから後の代々の時代にも再び起こらない。3 彼らの前では、火が焼き尽くし、彼らのうしろでは、炎がなめ尽くす。彼らの来る前には、この国はエデンの園のようであるが、彼らの去ったあとでは、荒れ果てた荒野となる。これからのがれるものは一つもない。4 その有様は馬のようで、軍馬のように、

駆け巡る。5 さながら戦車のきしるよう、彼らは山々の頂をとびはねる。それは刈り株を焼き尽くす火の炎の音のよう、戦いの備えをした強い民のようである。6 その前で国々の民はもたえ苦しみ、みな顔は青ざめる。7 それは勇士のように走り、戦士のように城壁をよじのぼる。それぞれ自分の道を進み、進路を乱さない。8 互いに押し合わず、めいめい自分の大路を進んで行く。投げ槍がふりかかっても、止まらない。9 それは町を襲い、城壁の上を走り、家々によじのぼり、盗人のように窓からはいり込む。10 その前で地は震い、天は揺れる。太陽も月も暗くなり、星もその光を失う。11 主は、ご自身の軍勢の先頭に立って声をあげられる。その隊の数は非常に多く、主の命令を行なう者は力強い。主の日は偉大で、非常に恐ろしい。だれがこの日に耐えられよう。

2B 悪霊から悔い改めない人々 20-21

そしてヨエル書には、12 節に、「しかし、今、..主の御告げ。..心を尽くし、断食と、涙と、嘆きとをもって、わたしに立ち返れ。」とあります。ですから、主の心は悔い改めてほしいということなのです。ところが、そうではないという悲しい現実をヨハネは証言しています。

20 これらの災害によって殺されずに残った人々は、その手のわざを悔い改めないで、悪霊どもや、金、銀、銅、石、木で造られた、見ることも聞くことも歩くこともできない偶像を拝み続け、21 その殺人や、魔術や、不品行や、盗みを悔い改めなかった。

先に話しましたように、当時のローマ社会には、偶像と魔術、不品行が混じり合った異教が社会に浸透していました。その背後には悪霊がいます。そしてその悪霊こそが、悪霊に仕えている彼らを苦しめていました。これが最も大きな皮肉です。自分たちの仕えている悪霊が、彼らを五カ月の間、死にたいほど苦しいのに死ねない苦しみを与え、人類の三分の一が死ぬほどの恐ろしい軍隊として、彼れらを襲います。神は、そのように痛めつけられ、傷を受けている者たちが悔い改めることを願っておられます。しかし、彼らは神の善、慈しみ深さに信頼しませんでした。「ローマ 2:4-5 それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。」

私たちも、偶像のたくさんある社会の中に生きています。偶像そのものは神ではなく、単なる木や石で造られたものでありますが、人々がそれに仕えていることによって、神ではないものに仕えるという制度の中に悪霊が働きます。パウロは、「1コリント 10:20 いや、彼らのささげる物は、神にではなくて悪霊にささげられている、と言っているのです。私は、あなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません。」と言いました。しかしながら、今の社会で単なるしきたりと化している仏式や神道の儀式をそのまま、ここに書かれていることに当てはまるとは限りません。

むしろ、私たちは霊の戦いをもっと高度なものであると考えるべきでしょう。神ではないものを神

としていく、人の欲望を満たしていくということが行なわれているのであれば、それが偶像礼拝です。神ではなく他のものに頼って神に頼らない、そういった中で人はどんどんその人間性が蝕まれていきます。私たちが主イエスにつながり、教会として共に集まっていく中で、日本社会に働く悪霊というものが生々しく見えてきます。職場における極度のストレス、過労、そして自殺。人々の無気力、そうしたところにも偶像があるでしょう。

そして、魔術とありますが、これは薬とも訳すことのできる言葉です。先に話したように、オカルトには麻薬がすぐにやってきます。それだけでなく、黙示録 18 章には商業主義、物質主義に溺れているバビロンの都が、魔術にだまされているのだと断じています。私たちが、大丈夫ではないのに大丈夫だと思わせていく力、その見えなくさせているのも魔術と言ってよいでしょう。それから、「殺人」は、人を直接的に殺すことはなくても、陰から殺す、すなわち陰口や中傷、陰湿な形で人を追い込むというのは日常茶飯事です。そして、「不品行」は言わずもがな、です。日本の性産業は世界有数であります。そして、オタク文化がそれに拍車をかけています。そして、「盗み」も自分で働いたものではないものを、もらうだけで生きようとする社会になってきています。与えられている恩恵を当然の権利としていく空気は、盗みの文化です。

私たちはそこから贖われました。キリストの血によって贖われました。生活のいろいろな面で、贖いが現実のものとならないといけません。こうした肉の行ないの背後には悪霊がいます。悪霊は私たちを苦しめます。しかし神はその憐れみによって、悔い改めて主に立ち返ることを願われています。